

学会名 第32回日本慢性期医療学会  
(2024年11月14日～15日)

研究テーマ 入院時からのACPの取り組み —大好きな羊羹を食べたい—

病院名 医療法人喬成会 花川病院

演者 ○工藤 香菜(看護師) 豊澤 涼子(看護師)

## 概要

### 【はじめに】

地域包括ケア病棟には「意思決定支援の指針」の策定が役割にある。今回は、死期が近い患者と、代理判断を委ねられたその家族と対話を重ね、寄り添い介入した症例を報告する。

### 【事例紹介】

患者：K氏 80歳代 女性  
入院期間：令和X年8月～10月  
病名：肺炎後の廃用症候群  
既往歴：嚥下障害、認知症  
背景：背景：食べるのが好きで、若い頃は体格がよかった。子供達との関係は良好。晩年、独居生活を送っていたが身体機能が低下し施設に入居。

### 【経過】

何度も誤嚥性肺炎を繰り返し治療。一度は状態が回復し自力で食事摂取ができるようになったため退院されたが、わずか1ヵ月も経たないうちに肺炎再燃のため入院となった。治療によって肺炎は改善されたものの、嚥下機能の低下が著しく飲み込みが難しくなる。家族には他の栄養方法に関することや食事摂取ができないため死期が近いことなどを説明した。家族は延命治療か、否か、栄養手段の方法をどうしたら良いか気持ちが揺れ動いていた。患者は担当の看護師に食べたいことを訴え、また、コロナ禍で面会が制限されている中で家族とも対話を重ね、大好きな羊羹を家族とともに摂取する事ができ、その4日後に最期を迎えた。

### 【結果・考察】

患者は大好きな羊羹を食べ笑顔がみられ、家族は母親の喜ぶ姿をみる事ができ最期に感謝の言葉が聞かれた。私達の看護介入が妥当であったのか、医療倫理に沿って考察した結果ACPが不十分である事がわかった。

### 【まとめ】

今後、我が国の終末期医療は療養の場を問わずACPが主軸となる。終末期ガイドラインに従いながらACPを重ねてQODを高めていくことが必要になると長尾氏は述べていることから、患者やその家族が元気なうちにACPを始められ、その人らしいエンディングを迎えられることが望ましいと考える。